

「総合的な学習の時間」の授業を改善する教師の研修プログラム

中野 真志* 太町 智**

*生活科教育講座

**豊川市立東部中学校

A Training Program for Improving Lesson in the Period for Integrated Studies

Shinji NAKANO* and Satoshi OHMACHI**

*Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Aichi Toyokawa Tobu Junior High School, Toyokawa 442-0024, Japan

I 研究の目的および背景

学校教育に対する社会的な要請およびニーズが多様化・複雑化する今日、優れた実践的力量を備えた教員の養成、現職教員の研修は不可欠となっている。

我々は、「生活科を担当する教師の指導力を高める研修プログラム」¹⁾において、生活科における教師の実践的力量を促進する研修のあり方について検討した。

「総合的な学習の時間（以下、「総合的な学習」と表記する）」については、全面実施される以前から学力低下の問題が指摘され、批判された経緯があるものの、現状ではある程度定着してきた。これまでの実践を通して、学校現場からは、子どもたちが自ら調べ・まとめ・発表する力、思考力・判断力・表現力、学び方や学習意欲が向上するなど、肯定的な声が上がっている。その一方で、目標や内容が明確でなく検証や評価が不十分な事例、教科等の学習内容との関連が十分配慮されていない事例、必要かつ適切な指導を欠く事例など、多くの課題があるのも事実である。さらに、教師間格差や学校間格差があり、特に地域や学校種における取り組みの格差は顕著である。

中央教育審議会（平成20年1月）は、「総合的な学習の時間の改善の基本方針」の答申の中で、「総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとすることから、思考力・判断力・表現力等が求められる『知識基盤社会』の時代におけますますます重要な役割を果たすものである。」²⁾と、総合的な学習の役割の重要性を指摘している。

そして、生活科および総合的な学習における教師の

実践的力量は、思考力や問題解決能力などの育成に重点を置く新学力観に基づく授業づくりの基底的な力量である。従って、生活科および総合的な学習における教師の実践的力量を高めることは、他教科等における教師の実践的力量形成にとっても極めて有効に働くと考えている。

そこで、本研究では、特に総合的な学習に焦点を当て、教師の実践的力量を促進する有効な研修プログラムを開発し、その有効な活用の方法について検討したいと考えた。

II 研修プログラムの内容

本研究で開発した研修プログラム³⁾は、コンピュータによるプレゼンテーションを使用するものである。研修の担当者がプレゼンテーションを展開し、研修の参加者がその内容に基づいて協議する中で、総合的な学習の目標、内容、指導方法等についてについて深く理解することや、学校や地域独自のカリキュラムの作成を促進することをねらいとしている。カリキュラム作成の実際については、後に記述することにした。本章では、研修プログラムの土台となるプレゼンテーションの具体的な内容について紹介する。作成したプレゼンテーションのテーマは以下の通りである。

- (1) 教科とは何か、総合とは何か
－総合的な学習の有効性－
- (2) 総合的な学習の時間の危険性・問題点
- (3) 学校の特色あるカリキュラムづくりに向けて
－価値あるカリキュラム・デザイナー－
- (4) 「新学習指導要領」における「総合的な学習」
－横断的・総合的な学習、探究的な学習、協同的な態度の育成－

ここに挙げたテーマは、総合的な学習のみならず、学校の教育活動全体に関わるものである。このようなテーマを設定したのは、総合的な学習の特質によるものである。他教科等との強い関連性をもち、地域社会と深く結びつく総合的な学習における教師の実践的力を高めるためには、学校の教育活動全体を見直す研修が求められるからだ。

これらのテーマの具体的な内容について、以下に概説する。

(1) 教科とは何か、総合とは何か

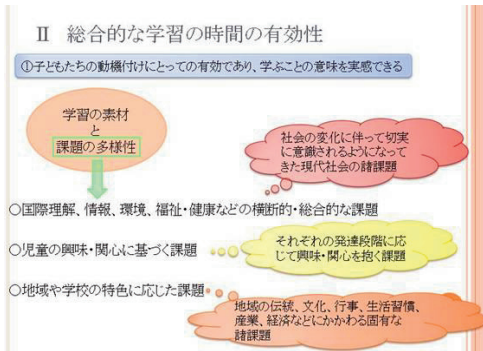
－総合的な学習の有効性－

このテーマでは、はじめに、総合的な学習が創設された趣旨と経緯、そして、改訂の趣旨について概説する。特に、これまで行われてきた特定の教科の知識・技能の習得を図る取り組みや、学校行事やその準備と混同されている取り組みなどを整理し、総合的な学習のねらいや育てたい力を明確にすることの重要性を示す。

そして、総合的な学習の有効性として、以下の3点を取り上げている。

- ①子どもたちの動機付けにとっての有効であり、学ぶことの意味を実感できる。
- ②教科だけではなく学級の壁、学年、学校、教師間の壁を越える。
- ③家庭や地域と連携することによって、家庭の教育力、地域の教育力の回復につながる。

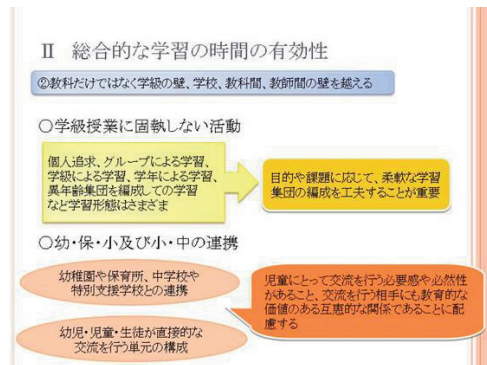
①では、「学習の素材と課題の多様性」に焦点を当てる。総合的な学習では、伝統的な教科の枠組みに限定されない多様な学習素材を活用できることや、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題など、多様な課題を取り扱うことで、子どもたちが学ぶ意味を実感しやすくなる。近年、子どもの学習意欲の低下が問題視されているが、総合的な学習が子どもの生活と学習とを近づける効果的な手段となり得ることを明らかにする。



②では、目的や課題に応じて柔軟に学習集団を編成すること、そして、「幼・保・小」及び「小・中」で

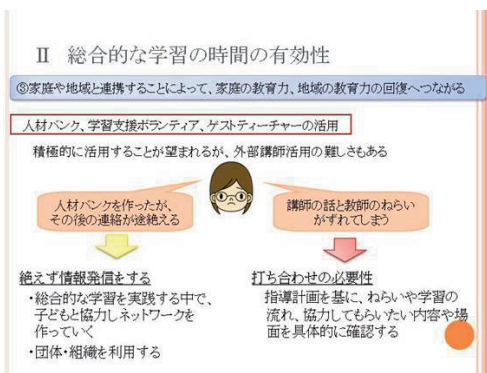
の連携を強化することで、より学習の効果を上げられることに触れている。特に、他の教育機関との交流について詳しく説明をしており、例えば小学校が中学校や幼稚園、保育所などと交流を行う場合は、小学校だけでなく、相手にも教育的な価値のある互恵的な関係を築くことの重要性を説明している。

総合的な学習では、各学校で独自のカリキュラムを開発するので、教師たち自身の協同・創造性が試される。問題を解決するために、多様な人々をコーディネートするといった、教師による協同的な学びが生み出される。このように、教師間の壁を取り払うことのできる総合的な学習の可能性について論じ、校内研修などで教師間の活発なかかわりを期待している。



③は、地域のもつ教育力を大いに活用することができるという視点である。学習活動を通して、子どもたちは地域への愛着を高めることができる。さらに、学習活動が町づくりに影響を与えたり、地域環境の保全につながったりする。また、地域の人々に積極的な参加を促すことで、学習の効果を高めることができる。

人材バンクや学習支援ボランティア、ゲストティーチャーなどの外部講師を活用することも有効であるが、外部講師の継続的な活用には特有の難しさもある。担当者の交替や異動等に伴い、これまでに築かれたネットワークが絶えてしまうことも少なくないからだ。しかし絶えず情報を発信していくことや、事前に打ち合わせをすることで、このような難しさを軽減することができる。地域とのつながりが特に深い総合的な学習だからこそ、どのようにして地域の教育力を生かすことができるかを示している。



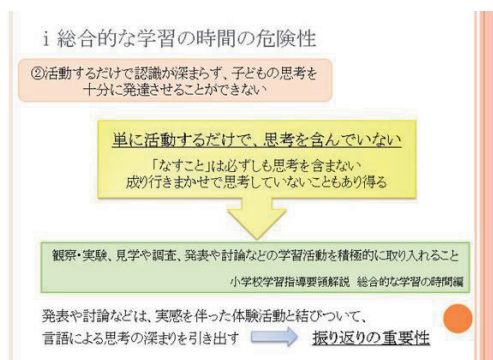
(2) 総合的な学習の時間の危険性・問題点

このテーマでは、総合的な学習に関して指摘されている下記の課題や問題点について取り上げ、その現状や解決策について提示する。

- ①断片的で無計画になりやすい
- ②活動するだけで認識が深まらず、子どもの思考を十分に発達させることができない
- ③個性を重視しすぎて社会化の過程を軽視する
- ④従来の学力観、評価観に依存し固執している限り、成功する可能性はほとんどない
- ⑤総合的な学習のための教師の力量形成の難しさ

例えば、「①断片的で無計画になりやすい」という問題については、従来の教科と総合的な学習との「学ぶべき内容」や「カリキュラムの構成要素」の違いから、単元構想の必要性や単元構想に必要な要素を明らかにしている。

また、「②活動するだけで認識が深まらず、子どもの思考を十分に発達させることができない」という問題については、「観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動の充実」や「振り返り活動の充実」、そして、「真の問題解決学習への転換」をキーとした改善方法を提示している。



さらに、「⑤総合的な学習のための教師の力量形成の難しさ」という問題には、教師の自由裁量が大幅に増加し、学校独自のカリキュラム開発が可能になったという背景がある。このことは、教師間格差や学校間格差が広がる可能性をもっている。それゆえ、教師および教師集団のカリキュラム開発にかかわる資質や能力の向上が求められている。

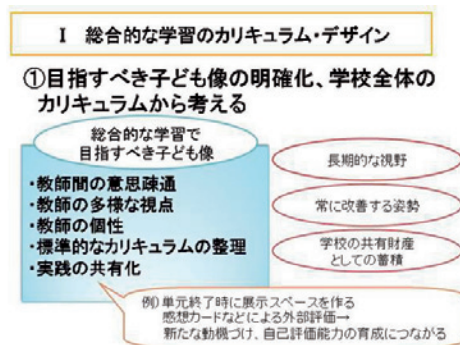
総合的な学習の実践上の問題点として、「学校間格差・教師間格差」「ハードとソフトの両面での条件整備の不十分さ」等を挙げている。本研修プログラムの活用はこれらの問題点の改善のために役立つものであると確信しているが、それぞれの学校で、具体的にどのようなことが問題になっていて、どのような手を打つか、このテーマを通して検討してもらいたい。

(3) 学校の特色あるカリキュラムづくりに向けて

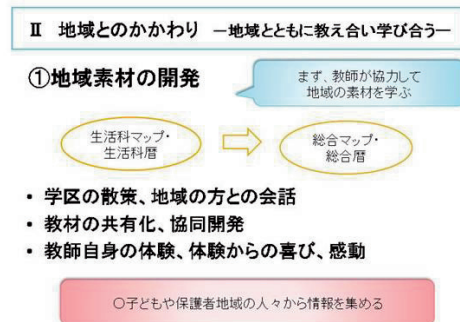
一 価値あるカリキュラム・デザイナー

このテーマでは、「総合的な学習のカリキュラム・デザイン」「地域とのかかわり」「総合的な学習の評価について」の3つの点から、学校の特色あるカリキュラムづくりのあり方を提示する。

「総合的な学習のカリキュラム・デザイン」では、それぞれの学校でカリキュラムをどのように作成していくか、その視点を示している。そして、課題の見つけ方やカリキュラム作成の際の留意点なども取り上げた。



地域とのかかわりでは、地域素材の開発の仕方やその際の視点などについて示している。実際に教師が足を運び、地域の人々とコミュニケーションを取り、地域素材を開発することの必要性を説明している。

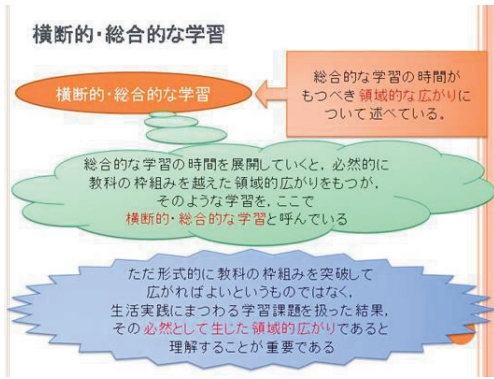


(4) 「新学習指導要領」における「総合的な学習」

一 横断的・総合的な学習、探究的な学習、協同的な態度の育成一

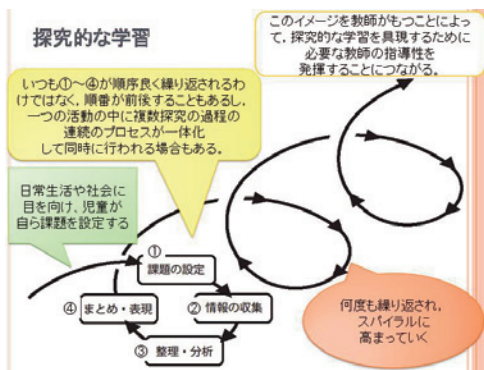
このテーマでは、学習指導要領の改訂に伴って改めて示された「横断的・総合的な学習、探究的な学習、協同的な態度の育成」に焦点を当て、その実際について詳しく説明する。

最初に、「横断的・総合的な学習」や、「探究的な学習」とは何かを明らかにする。



『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』（平成20年8月）には、探求的な学習の「課題の設定」から「まとめ・表現」までの4つのステップが示されている。ここでは、それらについて一つずつ説明している。

「協同的な態度の育成」では、協同的に学ぶことの価値について説明するとともに、学習活動における協同的な学びの具体例を示し、より質の高い学習を成立させるためのヒントを与える。



Ⅲ 研修プログラムを活用した実践例

前節では、作成したプレゼンテーションの概要を紹介した。このようなプレゼンテーションを活用して、研修を有意義なものにする手だてを検討することが、本研究において最も大切な視点である。本節では、研修プログラム(3)「学校の特色あるカリキュラムづくりに向けて－価値あるカリキュラム・デザイナー－」を基に、現職研修の一環として、教師が自らの手で学校全体の総合的な学習のカリキュラムのデザインに着手した例を紹介する。

総合的な学習を担当する教師が直接カリキュラムをデザインしていくことは、教師の実践的力量を向上させる上で大変有効である。しかし、既存のカリキュラムが見直されることなく進められる実践も少なくない。平成20年に学習指導要領が改訂され、総合的な学習においても、目標や内容等が見直されている。そのため、どの学校においても、既存のカリキュラムを見直す必要がある。

豊川市立平尾小学校では、「総合・特別活動研究部会」を設置し、総合的な学習のカリキュラム開発に取り組んできた。⁴⁾ その過程で、今回作成した研修プログラムを活用した。以下、その実際について紹介したい。

【事例】豊川市立平尾小学校における総合的な学習に関する校内研修会の実際

平尾小学校は全校児童200名程度という小規模の学校である。これまで、小回りが利くという特性を生かし、多くの体験的な学習活動を行っていた。人的にも物的にも、学習の素材が豊富に存在し、総合的な学習では、これらの素材を生かした取り組みが行われてきた。しかし、どのような子どもたちを育てようとするのかという意思統一が十分に図られておらず、活動することのみに主眼が置かれる傾向が見られた。単に活動するだけでは、子どもの思考を十分に発達させることはできない。

そこで、本校の総合的な学習のカリキュラム全般について、大幅な見直しをすることになった。最初に、総合的な学習の「目標」「育てようとする資質や能力および態度」「内容」を、本校の地域や児童の実態をもとに見直すことにした。

(1) ねらい・育てたい力の明確化

研修プログラム(3)では、総合的な学習を、目指すべき子ども像の明確化、学校全体のカリキュラムから考えることを提案している。この提案に沿って、今の本校の子どもたちの実態を考慮し、目指す子ども像を明らかにすることからスタートした。

新学習指導要領では、育てようとする資質や能力及び態度について、「学習方法に関すること」「自分自身に関すること」「他者や社会とのかかわりに関すること」の3つの視点が提示されている。そこで、本校の児童の実態について、良い面や課題となっている面、子どもたちの学習への取り組みの様子について感じていることを、ワークショップ形式で出し合い次のようにまとめた。

①学習方法に関することについて

本校の児童の多くは、活動そのものには意欲的に取り組もうとしている。しかし、活動が学習に結びついていないケースも見受けられる。例えば、調べ学習で、インターネットのホームページや文献をそのまま書き写すといった、形式的・表面的なまとめ方に終始してしまうことや、劇や発表会のための練習に多くの時間を費やし、大がかりな発表をするが、その後の生活に影響を及ぼしていないことなどである。このような問題の原因の一つに、児童に目的意識を持たせられていないことが挙げられる。相手や目的を強く意識させる取り組みが必要である。

②自分自身に関すること

本校には、自信のない児童、自己肯定感の低い児童が少なくない。この点については、多くの教師から同様の声が聞かれた。

これまでの取り組みを振り返ると、教師から与えられた課題や問題を解決することに重点が置かれてきた。そのため、子どもたちは、活動そのものには意欲的に取り組むものの、そこで達成感や成就感を十分に得られなかったのではないかと考えられた。子どもたちが自ら課題を見つけ、追究していく場を設けることで、子どもたちの自己肯定感を育成することができるだろう。

③他者や社会とのかかわりに関すること

本校の校区には、学びの対象として価値のある豊かな自然や高齢者福祉施設、ごみ処理場など、さまざまな施設が存在する。また、地域の伝統や文化を継承するために、労を惜しまず学校や児童に協力して下さる地域の方々がたくさんいる。しかし、子どもたちは、自然の中で遊ぶ経験に乏しい。また、地域の人や社会との関わりの薄い児童も多い。

地域のよさを生かし、自分が地域の一員であるという自覚をもてば、自分の思いや願いをもって、地域の人やものにかかわっていくことができると考えられる。

これらの児童の実態を踏まえ、育てようとする資質や能力及び態度について、以下のように設定した。

- ①相手や目的に応じて、分かりやすくまとめ、表現する力（学習方法に関すること）
- ②自らの行為について意思決定する力（自分自身に関すること）
- ③他者と協同して課題を解決する力（他者や社会とのかかわりに関すること）

(2) 内容・学習の素材の選択

既に述べたように、本校には学習の素材が豊富に存在する。しかし、このような地域素材の整理や教師間の共有化が不十分であった。

そこで、地域素材の整理や共有化のために、それぞれの教師がこれまでに活用したものや、地域の方との対話から活用ができそうなものを出し合い、表にまとめることにした。この手法は、「生活科マップ」や「生活科暦」を参考にした。これらは、生活科発足当初、各学校で作成されたが、教科書の充実に伴い、これらのものが見直されたり、活用されたりしている学校は多くない。野田敦敬(2009)は、「一定の時間を決めて、全校体制で地域の環境を調査する」ことで、生活科マップや生活科暦の見直しや活用を図ることを提案してい

6年	やまびこ交流	お年寄りとの かかわりから学ぶ
5年		米作りやそれにかかわる 人々から学ぶ
4年		地域の自然や環境を 守る取り組みから学ぶ
3年		地域の自然や人との かかわりから学ぶ
2年	やまびこ交流 (生活科)	年間 50 時間
1年		
		年間 20 時間

図2 平尾小学校の総合的な学習の全体像

る。⁴⁾

本校の地域素材を簡単にまとめたものが後掲の図1である。ここに、活用できる時期や連絡方法、これまでの活用の仕方などを書き込み、情報を増やしていきようにした。こうすることで、学習素材や有益な情報を学校の共有財産として蓄積することができる。

これらの学習素材の中で、特に出会わせる価値の高いと考えられるものを、子どもの発達段階や系統性、子どもの意識や生活の流れ等に配慮し選択する。本校では、3年生は「地域の自然や人とのかかわりから学ぶ」、4年生は「地域の自然や環境を守る取り組みから学ぶ」、5年生は「米作りやそれにかかわる人々から学ぶ」、6年生は「お年寄りとのかかわりから学ぶ」を主なテーマとした。また、本校の校区には養護学校があり、これまでも継続的に交流活動が行われてきた。この交流学習は「やまびこ交流」と呼ばれている。このやまびこ交流は、ある時期に集中して実施するのではなく、継続的に系統性をもたせて実施するのが望ましいと考えた。そこで、図2のように、やまびこ交流についてはおよそ20時間の単元を構想することにし、およそ50時間を、各学年のテーマに沿った学習を進める時間に充てることにした。

どの学習素材にいつ、どのように出会わせるかについては、部会から例示はするが、担当する教師が子どもの実態を踏まえながら検討していくことにした。ここには、教師の明確なねらいと、子どもたちの思いや願いとの擦り合わせが必要である。子どもと共に総合的な学習のカリキュラムを創っていくのである。

(3) 子どもの姿を見据えた計画立案

主となるテーマが決まり、テーマに関連する学習素材に目星をつけたところで、総合的な学習の具体的な計画を立てていく。本校では、目標や考えられる具体的な活動（学習素材の活用方法）について、研修会で検討をした。

表1 研修会で出された目標および具体的な活動内容例

学年	テーマ	目標	想定される具体的な活動内容
3年	地域の自然や人との かかわりから学ぶ	①地域の自然や、そこに生活する人々とかかわる中で、わかったこと、気付いたことを、わかりやすくまとめ、仲間に伝えることができる。	・低学年の児童や地域の人々など、参加する相手にとって分かりやすい資料を準備する。 ・自分の言葉で、相手に分かったことを伝える。
		②地域のよさを知り、地域に生活する人々や、地域の活動に進んでかかわろうとすることができる。	・自分の調べたいことを決める。 ・知りたいと思ったこと、疑問に思ったことをインタビュー形式で質問する。 ・地域のイベントに参加する。
		③友達と協力して、わかったことや気付いたことについてまとめたり、発表したりすることができる。	・グループで模造紙などにまとめ、発表する。 ・自分が調べて分かったことを、友達に詳しく教える。
4年	地域の自然や環境を守る 取り組みから学ぶ	①地域の環境を守る取り組みについて調べたことを分かりやすく学習記録にまとめ、仲間に伝えることができる。	・ごみを減らすための取り組みについて、地域の生産者、販売者、消費者の話聞き、その工夫や思いに付き、自分の言葉でまとめたり、伝えたりする。
		②地域の環境を守る取り組みについて進んで調べ、環境を守るためにできる活動に取り組むことができる。	・ごみを減らすための取り組みについて調べることを決める。 ・自分にできるエコ活動を考える。 ・エコ活動に進んで取り組む。
		③地域の環境を守るためにできることを、仲間と協力して、呼びかけたり、発表したりすることができる。	・グループで話し合いながら分かったことを絵や図に表したり、劇で表現したりする。 ・学習発表会などの場を利用して、全校児童や地域の人に発表する。
5年	米作りやそれにかかわる人々から学ぶ	①地域の農業生産（米作）について調べて分かったことを、自分なりの方法でまとめ、相手に分かりやすく伝えることができる。	・田植えや稲刈りの方法を、図や絵を用いて全校に伝える。 ・米作りについての調べ学習をする。
		②自分なりの思いや願いをもって米作りについて学び、米を作る方法やお世話になった方に感謝する方法を考えることができる。	・米作りの手順、稲の育ち方、害虫などに関心を持ち、調べたり発表したりする。 ・米作りを教えてくださいと地域の方へ感謝の気持ちを表す方法を考える。 ・できあがった米の調理法やわらの利用方法を考え、実践する。
		③米作りの作業や調べ学習を仲間と協力して行うことができる。また、米作りについて教えてもらったり、質問したりして、地域の方々とかかわることができる。	・仲間と協力して米の調べ学習をする。 ・グループで協力して稲刈りや脱穀などをやる。 ・地域の方に、米作りで分からないことや困っていることなどを質問したり、教えていただいたりする。 ・仲間と協力して、米作りで学んだことをまとめたり発表したりする。
6年	お年寄りとかかわりから学ぶ	①お年寄りにとってわかりやすい方法で話しかけたりゲームを楽しんだりすることができる。	・平尾荘などの高齢者福祉施設に訪問する計画を立てる。 ・ペアになったお年寄りに合った交流の仕方について話し合う。 ・交流を通じて学んだことを、新聞や劇などの表現方法でまとめる。
		②自分なりの思いや願いをもち、お年寄りのためにできることを考え、活動に取り組むことができる。	・ペアになったお年寄りに合った遊びや話題を考える。 ・交流した結果をもとに、学級で意見交換をし、よりよい交流の方法を考え、実践する。
		③お年寄りだけでなく、身近な家族や友達に対しても、相手のことを考え接することができる。	・仲間と協力して、交流の計画を考える。 ・お年寄りの良さや得意なことを見付ける。

表1は、研修会に参加した教師の意見をまとめたものである。既に述べたように、カリキュラムの作成では、教師の明確なねらいと、子どもたちの思いや願いとの擦り合わせが大切である。ここに示したものはあくまで例示であり、担当する教師が、子どもの実態に応じて具体的な計画を立てていく。

6年間という長い時間をかけて取り組むやまびこ交流については、系統的な学習となるよう、ねらいや学習の進め方について共通理解を図った。少し長くなるが、その具体的な内容について紹介したい。

学習の進め方について共通理解を図った内容は、次の4点である。

- ・第1回の交流は、1年生にとっては、初めての交流のため、養護学校やそこに通う子どもや障害についての知識や理解がほとんどない。そこで、最初に、養護学校の児童の生活の様子をビデオなどで視聴し、交流への見通しをもたせる。
- ・2年生以上の子どもたちは、前年度の交流を振り返る機会を設ける。振り返りでは、交流の内容だけでなく、前年度ペアだった子についての情報交換をすることで、どんなかかわり方ができるかを考えることができる。このような過程を通して、学級全体の目標に加えて、ペアグループならではの目標を設定することができる。

表2 やまびこ交流における各学年の具体的な目標

学年段階	具体的な目標の例
低学年	「〇〇くん」「〇〇ちゃん」と名前で呼ぶことができる。 手をつないで活動することができる。 ゲームのやり方をわかりやすく教えることができる。
中学年	ペアの友だちに、自分から声をかけることができる。 ペアの子の良いところを見つけることができる。 ゲームやダンスなど、ペアの子に合った交流の仕方を考えることができる。
高学年	ペアの友だちと一緒に楽しく遊ぶことができる。 ペアの子の良いところをたくさん見つけることができる。 ペアの子に応じて、ゲームやダンスの方法を考えることができる。

- ・目標を設定する際に最も配慮しなければならないことは、子どもたちにとって明確な目標を設定することである。設定した目標については、その後の段階においても、何度も確認させることが大切である。
- ・道徳との関連的な指導を行うことで、指導の効果を一層高めることができる。障害に関する書物やビデオなどを教材として活用することも有効である。

目標の設定については、子どもたちにとって、より具体的な目標となるよう、目指す子どもの姿を明らかにすることにした。本校で実際に提示した目標が表2である。

具体的な子どもの姿を想像して、どんなことをさせたいか、あるいは、どんな目標を設定するとよいか、複数の教師で検討し、意識を共有できたことがこの研修の大きな成果だと感じている。

IV 研究から見えてきたこと

平尾小学校では、校内研修の中で、今回作成したプログラムを活用した。特に若い教師にとっては、新しい視点で総合的な学習を捉えることができたようだ。

一方で、課題も見えてきた。今、学校現場が抱えている最大の課題に、今回取り上げたような研修を実施する時間が十分でないという点が挙げられる。今回紹介した平尾小学校での取り組みの1年目は、これまでの情報の整理に多大な時間を費やした。しかし、毎年情報を少しずつ更新し整理していけば、長い目で見たときには時間の節約になる。地域の状況は日々変化しており、教員も毎年入れ替わりがある。情報の更新、整理、共有化については、欠かさず行っていく必要があるだろう。

また、今回作成した研修プログラムをどのように活

用していくかという点も、今後検討していく必要がある。多忙な学校現場において活用できるように、研修の担当者が学校や研修の参加者の実態に応じて必要なテーマやその一部をピックアップするのがよいだろう。また、一方的な講義形式のものではなく、今回の事例で紹介したように、教師が実際に情報を整理したり共有したりする研修会をもつことで、より効果的な研修になるとともに、教師の負担を少しでも軽減できるものになるのではないだろうか。

もう一つの課題として、校種間格差がある。今回作成したプログラムは、主に小学校を対象にしたものである。中学校や高等学校での実践は、十分な成果があがっていないところが多い。今後、中学校以降の総合的な学習の実態を分析し、研修に求められるものを検討していきたい。

注

- 1) 太町智・中野真志「生活科の授業を改善する教師の研修プログラム」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要 第13号』、2010年
- 2) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」平成20年1月17日
- 3) 「生活科及び総合的な学習における教師の実践的力量形成のための研修プログラムの開発」、平成19～21年度科学研究費補助金〈基盤研究(C)(2)〉研究成果報告書、研究代表者：中野真志
本研究で使用したプレゼンテーションは、愛知教育大学大学院発達教育科学専攻生活科教育領域の院生の協力を得て作成されたものである。
- 4) 平成20・21年度文部科学省人権教育指定研究の一環として実践したものであり、取り組みの詳細については、研究紀要「笑顔が輝く平尾っ子」に掲載されている。
- 5) 野田敦敬「生活科における魅力ある教育計画の立案 指導計画及び単元計画等の作成上の留意点」、『初等教育資料』No.848、17～25頁、2009年6月

〔付記〕

本小論は、中野真志が研究代表を務める平成19～21年度科学研究費補助金〈基盤研究(C)(2)〉「生活科及び総合的な学習における教師の実践的力量形成のための研修プログラムの開発」の研究成果を活用し、太町智が日本生活科・総合的学習教育学会第19回全国大会京都大会（平成22年）において発表したものを加筆修正し、論文としてまとめたものである。

本研究に当たり、研修プログラムを実施させていただいた愛知県豊川市立平尾小学校の先生方に、心より感謝申し上げます。

(2010年9月3日受理)



図1 平尾小学校で整理し共有した代表的な「学習の素材」